



### 「水道」の歴史を探る

東松島市立矢本西小学校 6年 木村 蓮音

私たちの住む東松島市では、持続可能な町づくりへの取り組みとしてSDGsに力を注いでいます。SDGsの項目の一つに「安全な水の提供」がありますが、現在の私たちの暮らしは、蛇口をひねるとすぐに清潔な水が出て、生活をするのに困ることはありません。当たり前のように毎日使っている水道ですが、いつから水道が使えたのか不思議に思い、家族に聞くと「いつからだろうね、生まれた時からだから分からない。」とのことでした。私は、自分たちの暮らす地域の水道の歴史について調べてみたいと思いました。

日本に近代的な水道ができたのは、一八八七年だそうです。海外との貿易が活発になり、「コレラ」等の水を介して広がる伝染病のまん延を防ぐために、神奈川県横浜市に初めての浄水場ができました。それから、函館、長崎と港湾都市を中心に水道が整備されていきました。水道から水が出なかったときは、川の水や井戸水が飲み水、洗濯、食器洗い用として使われていました。

私たちの暮らす東松島や石巻地方でも、かつては良質な地下水に恵まれず、地域に井戸を掘るなどして水を確保していたそうです。北上川の水をそのまま飲用することも多く、住民たちには様々な伝染病がまん延していました。そんな中で、一九三三年から石巻水道事業団の給水が始まりました。私たちの使う水道が生まれたのが、今から約九〇年前のことで、自分が想像していたよりも最近の出来事と知り驚きました。

現在、一般家庭において一日に一人が使う水の量は平均二―四L程度だそうです。四人家族の場合は、約八五〇Lとなるそうです。水道のない時代のことを想像すると、井戸や川の水から一日に二〇〇L以上の水を準備するのは大変だと思いました。きっと当時の人たちは、生活に必要な水をどれぐらいの量を使うのかよく考えて準備し、限りある水を大切に使っていたのだと思います。

私の生まれる少し前には東日本大震災があり、大きな被害によってしばらくの間、広い地域で断水が続きました。私の暮らす東松島の多くの人たちは、震災当時は井戸水を汲んだり、自衛隊の給水車に並んだりして生活用水を準備していたそうです。昔のように、使うだけの水をよく考えて管理しなければならない震災時の経験は、きっと多くの人に「水」が限りある資源であり、暮らしを支えるかけがえのないものと気付かせるきっかけとなったと思います。

水道の歴史について調べることで、私は自分の水の使い方について考えることができました。水道からきれいな水が絶えず流れ出てくる今だからこそ、自分にとってどれぐらいの水が必要かよく考えることが大切だと思います。今回調べて分かった水道の歴史や使用量についてなど、家族や友達にも伝えながら、これからも大切に水を使っていきたいです。